

令和 2 年度 立正大学文学部文学科
日本語日本文学専攻コース
卒業論文発表会資料（白岩広行ゼミ）

心理動詞の類義語比較

自称詞と対称詞の変遷 ―人称代名詞の変化の特徴を中心として―

ことわざから探る人と動物の関係性

終助詞「ね」と「よ」のイントネーション

辞書の比較 ―学習用国語辞典と一般向け国語辞典を対象に―

音象徴から考える「音」と文字種の選択関係

日本語になった漢字文化とアジア諸国の漢字文化比較

心理言語学から見る言葉の歩み

日本語と韓国語の音声比較について

乃木坂 4 6 と欅坂 4 6 の歌詞表現の特性について

感動詞の変化 ―キリシタン文献の感動詞について―

「言語変化」と「誤用」の違い

奄美大島名瀬大熊方言について

※ 目次、主要参考文献の体裁について、白岩の判断で若干の変更を加えた箇所があります

※ 発表者の名前は伏せてあります

2021 年 2 月 2 日、編集：白岩広行

心理動詞の類義語比較

【論文の目次】

- 第1章 はじめに 1.1 本稿の目的 1.2 本稿の構成
- 第2章 先行研究の整理 2.1 韓麗娟 (1999) 「類義語「気にする」「気にかける」「気になる」「気にかかる」について」 2.2 加藤恵梨 (2018) 「「気になる」の意味分析」
- 第3章 表現の意味分析 3.1 検証概要 3.2 検証方法 3.3 検証対象辞書の選定について 3.4 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』について 3.5 用例記載のルール 3.6.1 「気になる」 3.6.2 「気にする」 3.6.3 「気にかかる」 3.6.4 「気にかける」 3.7 検証結果
- 第4章 心理動詞の自他
- 第5章 表現の比較分析 5.1 自動詞／自動詞、他動詞／他動詞の比較 5.1.1 検証概要 5.1.2 調査方法 5.2.1 「気にする／気になる」 5.2.2 「気にかかる／気にかける」 5.3 検証結果
- 第6章 自他対応の比較分析 6.1.1 調査概要 6.1.2 調査方法 6.2.1 「気にする／気になる」 6.2.2 「気にかかる／気にかける」
- 第7章 まとめ

【概要】

日本語の心理動詞であり、互いに類似した表現でもある「気になる」「気にする」「気にかかる」「気にかける」。これら4表現の意味を精査し、共通点及び相違点をより明らかにすることを目的として検証を行った。

論文内では先行研究の分類を軸にし、比較・置換検証を行うことで、再度意味の検討を試みた。考察の結果、「気になる」と「気にかかる」はどの用法においても置換可能だったため、限りなく意味の近い表現だという結論に至った。また、多くとも別義は2つだとしていた辞書の記述とは異なり、本論においては「気にかける」以外の表現において最大3つの用法を確認することが出来た。辞書の記述に欠けていたのは〈不快〉の用法だった。この「気にかかる」の〈不快〉の用法は韓 (1999) の研究の時点では確認されていなかったが、この度の置換検証では一つの用法として使用されているのを確認した。また、異なる性質間 (自動詞・他動詞) での置換検証では、表現は格句が伴っていなければ基本置換可能だが、自他の性質と相反する文末表現などが付属している場合には置換が不可能という条件を明らかにすることが出来た。

【主要参考文献】

- 加藤恵梨 (2018) 「「気になる」の意味分析」『朝日大学留学生別科紀要』15(15)、pp23-32
- 韓麗娟 (1999) 「類義語「気にする」「気にかける」「気になる」「気にかかる」について」『文芸論叢』(53)、pp15-27
- 三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』(8)、pp54-75

自称詞と対称詞の変遷
一人称代名詞の変化の特徴を中心として―

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究

第3章 人称代名詞「おれ」

3.1 節 「おれ」の意味 3.2 節 「おれ」の語誌 3.3 節 「おれ」の変遷

第4章 自称詞

4.1 節 各時代の自称詞 4.2 節 自称詞の変遷

第5章 対称詞

5.1 節 各時代の対称詞 5.2 節 対称詞の変遷

第6章 おわりに

【概要】

浅川・竹部(2014)による人称代名詞の変化の特徴は以下の通りである。

- (1) 自称代名詞と対称代名詞の交替
- (2) 指示代名詞から人称代名詞への転用
- (3) 人称代名詞が複数形になりやすい
- (4) 対称代名詞の待遇価値の低下

事前の調査によって、「おれ」は対称詞から自称詞に変化しているという点で、上記の特徴に当てはまらない特殊な変化をしている可能性が高いと見られたため、「おれ」の変遷を改めて整理し、それが人称代名詞の変化の新たな特徴として位置付けられるか考察することを目的として研究した。

「おれ」と同様の変化をしている人称代名詞があれば、考察の助けになると考えたため、浅川・竹部(2014)に挙げられている、時代ごとの主な自称詞と対称詞をそれぞれ書き出し、『日本国語大辞典(第二版)』を使用して変遷を調べた。

調査の結果、「おれ」と同様の変化をしている人称代名詞は見つけられなかったが、「自称」と「対称」のどちらの意味も持つ人称代名詞の多くが、反射指示としての用法を持っていることがわかった。以上より、「人称代名詞の変化には反射指示としての用法が大きく影響している」ことは人称代名詞の変化の新たな特徴として有力であるという結論に至った。

【主要参考文献】

浅川哲也・竹部歩美 (2014) 『歴史的変化から理解する現代日本語文法』 おうふう
米田達郎 (2017) 「人称詞オレの歴史的変化」『大阪工業大学紀要』 61(2)、pp1-12

【辞書】

『日本国語大辞典(第二版)』 (2000) 小学館

ことわざから探る人と動物の関係性

【論文の目次】

第1章：はじめに

第2章：ことわざ(諺)についての先行研究

第3章：日本で使われる動物のことわざについて(1)

3-1 「子(ねずみ)」に関することわざ

3-2 日本語のことわざにおける子の扱われ方

第4章：日本で使われる動物のことわざについて(2)

4-1 「寅(とら)」に関することわざ

4-2 日本語のことわざにおける寅の扱われ方

第5章：日本と諸外国のことわざ比較

5-1 意味が共通することわざ同士で、異なる動物が扱われているもの

5-2 意味が共通することわざ同士で、一方が動物を扱っているもの

5-3 ことわざで示される動物の優劣認識

第6章：まとめ

第7章：おわりに

【概要】

ことわざ(諺)とは、古典や経典から引用され使われた成り立ちのものが多くあるが、人々の生活の知恵から生まれ定着したことわざも数多く存在する。こうしたことわざはその言語圏の暮らしが的確に投影されているのではないかと考え、日本国内と国外で使用される動物名を含んだことわざを比較し、日本人の生活で動物たちがどのように扱われてきたのか調査した。

第3章、第4章では日本語のことわざのみを取り上げ、ネズミとトラに対して日本人が抱いてきたイメージを考察し、ネズミはマイナスの印象以外の意味でも使われていること、トラは生物としてよりも毛皮や絵画に描かれるものとして使われるということがわかった。第5章では日本語、台湾語、英語、中国語のことわざを条件で絞り比較し、日本とその他の国で親しまれる動物のちがいや価値観について考察した。

各国のことわざには国民性がみられ、扱われる動物はその地域に馴染みのあるもの、あるいは馴染みのある形で表現され国民生活との関わりを示していると結論づけた。

【主要参考文献】

大関惇史(2014)「日米ことわざ比較から見る国民性」『PLUSi』10、神奈川大学人文学会

加藤迪男(2010)『十二支(えと)のことわざ事典』日本地域社会研究所

張福武編著(2005)『日本語・台湾語・英語・中国語対照 四ヵ国語共通のことわざ集』慧文社

終助詞「ね」と「よ」のイントネーション

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究のまとめ

2.1 「ね」の機能 2.2 「よ」の機能 2.3 「ね」と「よ」の持つ制限

2.4 「ね」のイントネーション 2.5 「よ」のイントネーション

2.6 「ね」と「よ」のイントネーションと機能の相互関係

第3章 「ね」と「よ」のイントネーションと機能

3.1 本稿のイントネーション記述の枠組み

3.2 音声分析ソフトによるイントネーションの調査 3.3 「ね」の機能とイントネーション

3.3.1 強調上昇調の「ね」 3.3.2 疑問上昇調の「ね」

3.3.3 無音調（平調）・上昇下降調の「ね」 3.4 「よ」の機能とイントネーション

3.4.1 疑問上昇調の「よ」 3.4.2 無音調（平調）の「よ」 3.4.3 上昇下降調の「よ」

3.5 調査結果からの考察

第4章 おわりに

【概要】

日本語の会話において、終助詞の果たす役割は大きい。特に「ね」や「よ」は頻繁に使われ、自然な会話の流れに欠かせないものである。会話の中で、なくても大きく意味が変わるわけではないが、これらの終助詞なしで自然な会話は成り立たない。そこで、「ね」と「よ」にはどのような機能があるのか少しでもはっきりさせるべく、それぞれの役割をまとめた。

また、「ね」と「よ」はイントネーションがさまざまであり、話し手の心的状態や対人態度を反映する部分が多いことがわかっている。本稿では音声分析ソフト Praat を用いてイントネーションを視覚化し、機能との関係についても調査した。

調査の結果、「ね」も「よ」も様々なイントネーションがあり、話し手の態度や感情、聞き手に求める反応や対応によって細かく使い分けられていることがわかった。「ね」と「よ」には基本的な機能の部分とイントネーションの部分があり、それらを使い分けることによって自然な会話が成り立っているのだと考察した。

【主要参考文献】

大島デイヴィッド義和 (2013) 「日本語におけるイントネーション型と終助詞機能の相関について」『国際開発研究フォーラム』43, p47-63

大曾美恵子 (1986) 「誤用分析 1 『今日はいいい天気ですね。』 — 『はい、そうです。』」『日本語学』5-9

郡史郎 (2015) 「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』41, p85-p107

辞書の比較

—学習用国語辞典と一般向け国語辞典を対象に—

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究

2.1 今野(2015) 2.1.1 辞書の編集方針 2.1.2 類義語についての考察

2.2 大塚ほか(2016) 2.3 矢澤ほか(2016)

2.4 大塚(2018) 2.4.1 語釈の問題 2.4.2 例文の問題

第3章 調査対象辞典について

3.1 調査対象辞典 3.2 辞書選定基準 3.3 調査対象辞典の編集方針 3.4 調査方法

第4章 調査結果

4.1 同じ見出し語での記載内容の比較 4.2 誤用とされる言葉の比較

4.3 語釈に使われている言葉についての検討

4.4 近い意味を持つ言葉の語釈についての検討

第5章 総括

【概要】

本研究では、あまり目を向けられることが無い学習用国語辞典の語釈や例文についての考察を行った。一般向けの国語辞典と学習用国語辞典の編集方針や語釈、例文を比較することによって、初めて辞書を使う者やまだ多くの語彙を獲得していない者が使うことを想定して作られている学習用国語辞典が語釈や例文にどのような工夫をしているのか、編集方針で内容にどんな違いが表れるのかを明らかにすることを試みた。また、両者を比較することで辞書の使用者にとって使いやすく理解しやすい国語辞典にするための課題についても考察を行った。

考察の結果、『三省堂例解小学国語辞典』は、解説が短く端的にまとめられていて、一般的でない意味や教育上知らなくても良い意味は記述されていないという傾向があった。また、対象の小学生にとって分かりやすい表現や言葉を使用して解説を書いていること、言葉の使い方を理解しやすいように語釈の中に分かりやすい基準を示していること、対象が語彙の獲得段階にあることを踏まえ言葉の「今」を意識するよりも「正しさ」を意識していること、見出し語の解説の中に情報が収まるようにしていることが明らかになった。このような解説の違いに、『学習用国語辞典』の工夫を見ることが出来る。また、解説を分かりにくくしている要因として、解説で使われている言葉が同書の中で記載されていないことや似たような意味を持つ言葉の解説で同じ言葉が使われていてその程度による違いが読み取りにくいことなどが挙げられた。

【主要参考文献】

今野真二(2015)『超明解！国語辞典』文芸春秋社

大塚貴史(2018)「学習国語辞典の課題に関する試論」『筑波日本語研究』22

音象徴から考える「音」と文字種の選択関係

【論文の目次】

- 1.はじめに
 - 1-1.音象徴とは
 - 1-2.文字種選択とは
 - 1-3.オノマトペとは
 - 1-3-1.擬音語と擬態語
 - 1-4.オノマトペの表記
- 2.先行研究から考える
 - 2-1.ブーバキキ効果
 - 2-2.日本語のイメージ
- 3.音とイメージ
 - 3-1.日本語の子音
 - 3-2.モーラとは
- 4.おいしいオノマトペ
 - 4-1.音韻と味覚の関係
 - 4-2.仮説
 - 4-3.調査結果とその考察
- 5.おわりに

【概要】

私は、「オノマトペ」について興味を抱き卒業論文のテーマとした。「オノマトペ」とは、擬音語・擬態語を指す言葉である。

本稿では文字種選択の観点から、私たちが普段選び使っている言葉の中でも、特に「オノマトペ」に音韻が影響しているのかどうかを調査した。先行研究の、既に考えられている子音や母音の音のイメージ、物の形状や印象によるイメージからくる文字選択などをふまえ、アンケート調査を行った。アンケート調査は、「なんで?」「どうして?」をスムーズに行えるようにヒアリング方式で行った。

調査の結果から、実際に音韻、さらに言うと子音や母音のイメージ、物の形状や印象が言葉選びに関係してくるということがより確かなものになったのではないかと考えている。

【主要参考文献】

- 増地ひとみ(2018)「オノマトペを表現する文字種の選択要因―「キンキン」と「ふわふわ」をめぐって」『愛知淑徳大学論集 創造表現学部篇』9、pp.33-47
- 川原繁人(2017)『「あ」は「い」より大きい!? 音象徴で学ぶ音声学入門』ひつじ書房
- 坂本真樹 (2019)『五感を探るオノマトペ「ふわふわ」と「もふもふ」の違いは数値化できる』共立出版株式会社

日本語になった漢字文化とアジア諸国の漢字文化比較

【目次】 第一章 文字とは 第二章 当て字や外国語を漢字にしたい欲求とは
第三章 中国との比較 第四章 まとめ

第一章

まず、文字とは多くの人に相互意思や抽象的思考の具体化を可能にし、知識の蓄積の手段として創造されたもので、共同体において独自の文字体系で文化形成を担う。会話を点や線に起こすことで記号の体系に規則を付加し視覚的情報に置換したものが文字である。会話の瞬間的な伝達機能の欠陥を補うことで言語の記録媒体的側面を拡張した。その中でも日本で独自の進化と文化を創造した漢字を明らかにする。

第二章

日本の当て字には色々ある。出鱈目、元々の日本語を表記したり、珈琲、外国語も使用される。

宮沢賢治は著作「銀河鉄道の夜」では南十字と表現し、英語を漢字に当てていた。読み物として外来語が世間に定着していなかった当時、特に児童に分かり易いような簡単な漢字が多く、多義的な意味を持つ日本の漢字だからこそその当てはめ方をしている。夏目漱石は著作内で当て字を多用し漢字文化に造詣が深かった。落語好きで洒落好きな漱石は五月蠅い現在辞書に記載されているものや、三馬（秋刀魚）現在の表現とは違和感を覚えるものも創作していた。日本における漢字の表現の豊かさを利用して読者の理解を深める舞台装置として使うのをわかっていた。現代は少し昔になるが、暴走族が使う夜露死苦・愛羅武勇などの強さを表すために過激な漢字を使うものに進化した。どうしても漢字で言葉を表現したい気持ちは、不良であろうが知識人だろうが共通して根底にある不思議な習性ではなかろうか。

第三章

中国人には音に敏感な面が顕著に垣間見える。仏教伝来時のサンスクリット語との比較の中で音の感覚への敏感さ、発音の意識化がなされた。隋に劉善経が「四声指帰」で南朝・梁の文人の沈約が四声論を成立させた。六朝時代に音韻学という学問研究が出来たことも起因している。中国語には声調があり四声という。母音にも長母音と短母音などの多種が存在したり、発音によって同じ言葉が異議のものになる言語が多いことから、発音することが大事にされている。中国では自身の子供が幼児期にピンインをマスターすることで他のご家庭のお子さんにマウンティングできるほど勉学においても重要なものである。

インドから中国に仏教が伝来し、マハラジャのマハは偉大なという意味で「摩訶」と音を当てている。ダーナは施しと使われ、元々英語のドナーと同じで、中国では檀家、日本では旦那と変化している。

中国では音を大事にだと述べたが、最近では熱狗がある。意味はホットドッグである。ホットドッグを熱い狗と表記することでそのまま分かるように意味と漢字を紐づけ始めているのだ。

第四章

日本語は日本人が作るべくして作り上げた理想と歴史の詰まった世界に誇る言語文化である。漢字を厚く奨励し、現在においても日本語というメカニズムに完全に歯車となって組み込まれてシステムとして稼働している。日本において植民地として支配されるといった歴史がないからこそ、漢字が現代まで使用される文化が生きているのだろう。もしも日本が島嶼国としてではなく大陸の一部であったならば言語文化にももっと地域ごとに差異が産まれていただろうし、そもそも標準語という概念が今のようなものではなく、インドのように公用語が混同している多言語国家の方が珍しくないのだから、独立した言語国家の日本語での漢字が文化に拒絶されずにどうにか馴染んだのも一理ある。

【主要参考文献】

大島正二（１９９７）『中国言語学史』汲古書院

笹原宏之（２０１０）『当て字・当て読み漢字表現辞典』三省堂

野村剛史（２０１３）『日本語「標準系」の歴史』講談社

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究まとめ

2.1 心理言語学とは 2.2 子供の言語獲得 2.3 一語文とは

第3章 助詞「ね」について

第4章 調査

4.1 調査目的 4.2 調査方法 4.3 調査結果と結果考察

第5章 間投助詞「ね」と「さ」の応答について

第6章 総合考察

第7章 今後について

【概要】

先行研究を踏まえ、本稿では心理言語学が有する分野の「ことばの獲得」に焦点を当てて研究を進める。今回は調査中に気になった助詞「ね」を中心に調査を展開していく。日本語日常会話コーパス (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/cejc/search>) を用い、言葉がどのように話されていくのか、年齢別による違いはあるのかといったことを調査する。今回は宇佐美(1997)の分類を参照し、「ね」を次の3つに分類する。

① 注意喚起－話し手中心用法（間投助詞的用法）

文中に登場し、自分の会話を強調したり相手の注意を喚起する。例「あのね、」

② 会話促進－相互作用的用法（終助詞的用法）

文末に登場し、相手の意見等を共有して同意を示すことで会話を円滑にする。

例「そうだね。」

③ 「ね」単独

「ね。」のように助詞「ね」単独で構成された文例を対象とする。例「いいね。」「ね。」調査結果を簡潔にまとめると、0～4歳児では①が最も多く、年齢が上がるにつれて②の割合が上昇していくことが分かった。

【主要参考文献】

宇佐美まゆみ(1997)「第11章 「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポ

ライトネス」現代日本語研究会編『女性のことば：職場編』ひつじ書房、p.241～269

村杉恵子(2014)『ことばとこころ－入門 心理言語学』みみずく舎

淀川裕美(2003)「2～3歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化：一伝え合う事例における応答性・話題の展開に着目して－」『保育学研究』51(1)、p.36～49

日本語と韓国語の音声比較について

【論文の目次】

第一章 はじめに

第二章 先行研究のまとめ

2-1. 子音を分類する基準

2-2. 日韓の子音の比較

2-3. 韓国語母語話者にとって発音、聞き取りが難しい日本語の子音

2-4. 日韓の音素体系について

2-5. サウンドスペクトログラムと破擦音、摩擦音の特徴について

2-6. 本論文の目的

第三章 調査と調査結果について

3-1. 調査方法

3-2. 「ツ」と「チュ」について

3-3. 「ザ行音とジャ行音」について

3-4. 「清音と濁音」について

3-5. 調査結果のまとめ

第四章 結果から考えたこと、おわりに

【概要】

新大久保の韓国人や韓流アイドルが「ツ」を「チュ」、「ザ」を「ジャ」といったように発音してしまっていることが気になっていた。そこで、韓国語母語話者にとって発音しづらい日本語の「ツ」や「ザ」、「清音と濁音」などを中心に、日本語と韓国語の音声について調べた。「ツ」や「ザ」、「清音と濁音」の中で、韓国語母語話者に上手く習得されやすい発音は何なのかが特に気になったため、音声分析ソフトの「praat」を用いて調査を進めた。

その結果、今回の調査の範囲では、比較的上手く習得されやすいのは「ツ」である、という結論に至った。筆者が予想していたよりも上手く習得されており、発音も綺麗にできているものが多い傾向にあった。また、「ザ行音」は、「ツ」や「清濁」と比べて正しい発音に近い発音が出来ているものが少ない傾向にあったことから、前者二つに比べて習得が困難であると考えた。

【主要参考文献】

油谷幸利（2005）『日韓対照言語学入門』（白帝社）

川原繁人（2018）『ビジュアル音声学』（三省堂）

衣畑智秀編（2019）『基礎日本語学』（ひつじ書房）

乃木坂46と欅坂46の歌詞表現の特性について

【論文の目次】

第1章 研究動機

第2章 作品の作り手について

2.1 秋元康について 2.2 乃木坂46について 2.3 欅坂46について

第3章 対象楽曲・研究方法

第4章 分析結果・考察

第5章 まとめ

【概要】

私達若者の親世代から変わらず現代においても、アイドルという存在は人々に元気や笑顔を与え常に人気を保っている。私自身も高校生の頃、友人にある日女性アイドルグループの存在を勧められてから日常の充実さが一変したのである。そのアイドルグループは、「乃木坂46」というグループである。私は日常的に音楽を聴いていてどのアーティストにも共通的に感じることであるが、歌詞には聞き手側の心に響いてくるフレーズがたくさん含まれていることに気づいた。こういった考えから、同じ事務所で同系列の、秋元康が作詞を担当している「欅坂46」の歌詞を比較し、それぞれどのような歌詞を手掛けているのか、また相違点や類似点は存在するのかを研究していく。秋元康の手掛ける歌詞の表現特性を調べるにあたり、今回は「ジャンル」「人称」「性別」「場所」「色彩」「心情の変化」の6つの項目に分けて分析を行った。両グループともに男性的一人称の使用頻度が高かったことから、メンバーが大人に対して訴えかけたいこと、主張したいことをより力強く表現されているのではないだろうか。また、乃木坂46は欅坂46に比べ後ろ向きな歌詞が圧倒的に少ないため、【前向き】【後ろ向き】【変化なし】が揃っていると、その多様性で視聴者の共感を得ることができ、聞き手を詞の中に引き込むことが可能なのではないかと筆者は考えた。乃木坂46は次世代エースが中心となりグループを引っ張っている最中であり世代交代で新しい時代へと移り変わり、欅坂46は「櫻坂46」へと改名し新しい一歩を踏み出しているため、今後の両グループのさらなる活躍に期待したい。

【主要参考文献】

山田敏広(2014)『あの歌詞は、なぜ心に残るのかーJ ポップの日本語力』祥伝社
伊藤雅光(2017)『J ポップの日本語研究-創作型人工知能のために-』朝倉書店
片山秋作(2010)『コブクロの歌詞の表現特性』大阪教育大学教育学部卒業論文

感動詞の変化
ーキリシタン文献の感動詞についてー

【論文の目次】

- 1、はじめに
- 2、先行研究まとめ
- 3、『邦訳日葡辞書』と『現代感動詞用法辞典』について
 - 3-1、『邦訳 日葡辞書』について
 - 3-2、『現代感動詞用法辞典』について
- 4、『邦訳日葡辞書』と『現代感動詞用法辞典』の比較
 - 4-1、比較方法
 - 4-2 『現代感動詞用法辞典』と『邦訳日葡辞書』の両方で見出し語になっている感動詞
 - 4-3 『邦訳日葡辞書』でしか見出し語になっていない感動詞
- 5、『天草版伊曾保物語』の感動詞
- 6、おわりに

【概要】

本論文では、『現代感動詞用法辞典』と『邦訳日葡辞書』を比較し、感動詞の意味や使い方がどのように変化しているか調査を行った。比較方法は『現代感動詞用法辞典』に載っている感動詞 420 語を基準とし、『邦訳日葡辞書』で調べ、意味や使い方を比較しどのように変化したかを調べた。

(1) 『現代感動詞用法辞典』と『邦訳日葡辞書』の両方で見出し語になっている感動詞

(1-1) 『現代感動詞用法辞典』と『邦訳日葡辞書』で意味がほぼ同じ感動詞

(1-2) 『現代感動詞用法辞典』と『邦訳日葡辞書』で意味が異なる感動詞

(2) 『邦訳日葡辞書』でしか見出し語になっていない感動詞

(3) 『現代感動詞用法辞典』でしか見出し語になっていない感動詞

に分類し、比較した。

(1-2)の意味が異なる語の中には両方とも感動詞として使われ意味が異なっている語と、そもそも感動詞として使われていなかった語があった。

また、『天草版伊曾保物語』を使い伊曾保物語で使用されている感動詞について調べた。『邦訳日葡辞書』で感動詞とされている語を中心に、文脈から感動詞の用法で使われている語をいくつか抜き出し考察を行った。

【主要参考文献】

浅田秀子 (2017) 『現代感動詞用法辞典』 東京堂出版

井上章 (1964) 『天草版 伊曾保物語』 風間書房

土井忠生・森田武・長南実 (1980) 『邦訳 日葡辞書』 岩波書店

ー「言語変化」と「誤用」の違いー

【論文の目次】

- 第1章 はじめに
- 第2章 言葉の誤用とはどういったものか
- 第3章 言語変化したとされる言葉の用法と特徴
- 第4章 日本語以外の言語における「言語変化」
- 第5章 まとめ

【概要】

この論文は、「誤用」とされている言葉の特徴と「言語変化」したとされる言葉の特徴の類似点や相違点、そして日本語とそれ以外の言語の「言語変化」を比較したものである。

なぜこの研究しようと思ったかという SNS（主に **twitter**）を使用していた時に私が知らない言葉の用例をしている人がいて、私は、その用法を誤用なのではないかと思い、誤用について調べ始めた。しかし、調べている間にその用法は言語変化した用法という考え方があることを知り、誤用と言語変化では何が違い、何が同じなのかという事を研究したくなりこの研究を始めた。第1章ではその事について詳しく書いている。

第2章では誤用とされている言葉の特徴について書いている。例えば、「なんなら」を本来の意味である「相手が実現を希望していることを仮定する気持ちを表す。もしよければ。相手がそれを希望しないことを仮定する気持ちを表す。気に入らないなら。」という使い方と違った「さらに」という意味で使われているというケース。
例文としては、来週有給休暇取ったし、なんなら3連休だわ。

第3章では言語変化したとされる言葉の特徴を書いている。言語変化したとされる言葉の変化の種類は 今回この論文を研究するにあたって参考にした **Joan Bybee(2019)**では音変化と類推変化と統語変化と意味変化と語彙変化の5種類がある。と書いていた。その中でもこの論文を研究するきっかけになった、全然を肯定的な意味で使う用法というのは意味変化に当たるというのが分かった。また、類推変化も日本語には多い。例えば医者のお医者さんと言ったり、味噌汁をお味噌汁、菓子をお菓子、背中をお背中と言ったりなどである。

第4章では、日本語以外の言語での言語変化について書いている。例えば、**dreamt** と **dreamed** のような類推変化がある。これも日本語の例と同じように、同じような変化、活用をしているものに引っぱられて変化、活用させてしまうというケースである。

第5章はそれらを受けてのまとめ、考察である。

【主要参考文献】

- 北原保雄（2004）『問題な日本語 どこがおかしい？何がおかしい？』大修館書店
- 北原保雄（2005）『続弾！問題な日本語 何が気になる？どうして気になる？』大修館書店
- Joan Bybee 著、小川芳樹・柴崎礼士郎訳（2019）『言語はどのように変化するのか』開拓社

奄美大島名瀬大熊方言について

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 奄美方言について

2-1 方言とは 2-2 日本語と日琉祖語 2-3 日本における方言区分 2-4 奄美方言の概要 2-5 奄美方言の地域差

第3章 奄美方言の音素

3-1 奄美方言の母音表記 3-2 奄美方言の母音変化 3-3 奄美方言の子音

第4章 語彙調査

4-1 調査目的 4-2 調査対象地域 4-3 調査対象者 4-4 調査方法 4-5 調査結果 4-6 考察

第5章 会話録音における方言動態調査

5-1 調査目的 5-2 調査対象地域 5-3 調査対象者 5-4 調査方法 5-5 調査結果 5-6 録音調査以外で得られた方言 5-7 考察

第6章 奄美方言の継承に向けて

6-1 方言継承の目的 6-2 奄美での方言継承活動 6-3 名瀬大熊における方言継承

第7章 まとめ

【概要】

鹿児島県奄美大島の方言を多角的に調査し、方言の使用状況と特徴を考察した。奄美方言は日本語（本土の言葉）の系統を持つものの、別言語とされる日琉語族に分類するという論があることを踏まえ、共通語と琉球語の双方の系統を引いている方言となっている。「危機言語データベース」に掲載されている語彙を聞き取る形で行った語彙調査では、共通語と同じ語彙・発音をするものや、琉球語特有の母音変化がなされるものなどがあり、また会話録音の調査では敬意表現や役割語などの存在も確認することができた。

また方言継承の観点では、現在奄美で方言を話すのは高齢者に限られ、高齢化により今後ますます方言話者が減少し、消滅してしまう言葉も出てくることを再確認した。

島内においても語彙や母音変化に地域差があり、独自の文化として今も残る奄美大島の方言を継承すべく、今後より一層の調査・研究が必要となると考えられる。

【主要参考文献】

岡村隆博（2009）『奄美方言 ～カナ文字での書き方～』南方新社

小川晋史（2015）『琉球ことばの書き方 琉球諸語統一的表記法』くろしお出版